

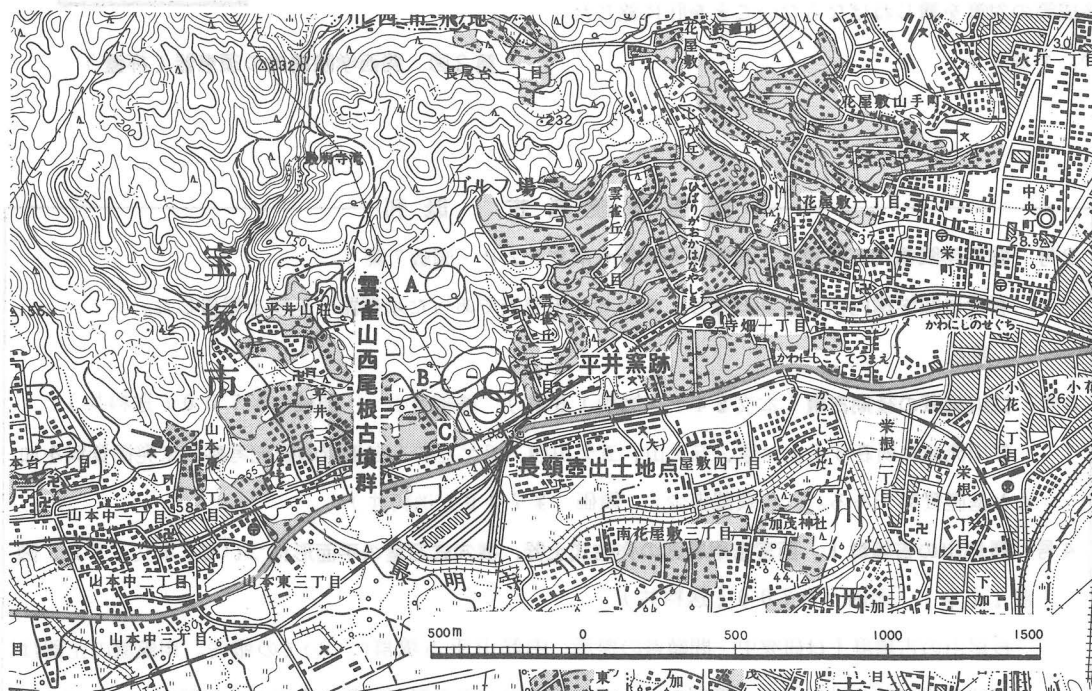
雲雀丘学園所蔵の長頸壺

坂井秀弥

宝塚市にある雲雀丘学園が敷地内から出土した須恵器を所蔵しているということを耳にした。地理的にみて長尾山の古墳群との関連がまず想定されたので、雲雀丘学園に足を運んでみたところ、実見し記録する機会を得た。また出土地点や経過なども聞くことができたので、ここに紹介することにした。なお発表することを快諾して下さいました雲雀丘学園に感謝いたします。

須恵器は学園のグラウンドにベンチを設ける際に出土したという。このグラウンドは雲雀山西尾根古墳群の分布する尾根の先端部標高40～50m付近を造成したもので、行政区画では宝塚市平井四丁目にあたる。出土地点はこのうちの北側削平面である。雲雀山西尾根古墳群はA・B・Cの3群より構成され、グラウンド全体はC群に含まれる。C群にはかつて2基の古墳が確認されていたが、グラウンド造成によって消失した。B群はC群の北200mにあり、現在10基の古墳(1号墳のみが小型横穴式石室)が遺存する^①。またB、C群の付近には平井窯跡が存在する^②。この窯跡については不明な点が多いが、7世紀から8世紀にかけて操業されていたようである。

さて、遺物は口縁部がわずかに欠損するほかは完全な長頸壺である。全体に厚手だがっしりしており、器高22.0cm、口径9.8cm、最大腹径16.3cm、脚径9.0cmを測る。口頸部に3条の凹線、胴部肩に1条



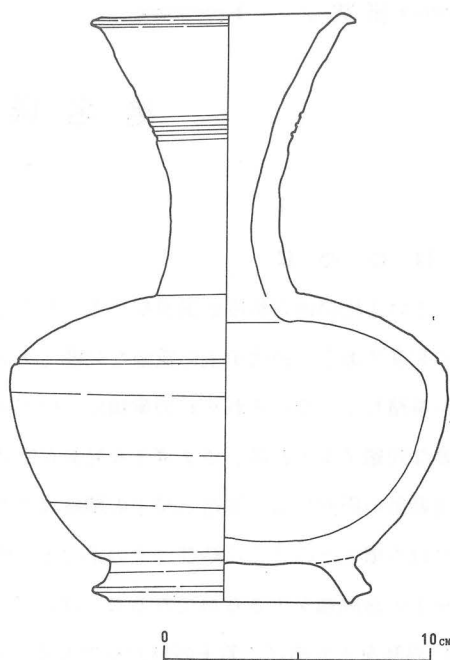
第1図 長頸壺出土地点

の凹線をそれぞれ配する。胴部下半はヘラケズリの痕がわずかにみられるが、全体にクロコナデを施す。口頸部はとくに強い。焼成は堅緻。胴部上半が自然釉で黄灰色を呈するほかは灰色である。胎土は細砂粒を多く含み、5mm大の砂粒も散見される。この長頸壺は船橋遺跡の須恵器Ⅰの型式に類似する^③。時期は7世紀末から8世紀前半に相当しよう。

出土状況が明確でないため遺物に伴う遺構ははっきりしない。しかし、位置からすれば古墳か窯のいずれかに伴うものであろう。古墳の副葬品とすると、あまりに新しすぎはしないかという懸念がある。長尾山の終末期古墳である小型横穴式石室からは7世紀後半以降の遺物は検出されていない。したがって平井窯跡の製品である可能性が強いわけであるが、その実態についてはよくわかっていないうえ、現地踏査でも窯壁など確認できなかった。時期的にみればやはり窯との関連を考えるのが妥当であろうが、結論は今後に保留せざるを得ない。

〈註〉

- ① 1・2号墳は昭和48年に発掘調査が実施されている。（宝塚市教育委員会『宝塚市雲雀山古墳群』、昭和50年）
- ② 笠井新也「摂津国川辺群平井山に於ける古代製陶所の遺跡及びその遺物」（考古学雑誌、5-9 大正14年）
- ③ 平安学園考古学クラブ『船橋』Ⅰ（昭和37年）



第2図 長頸壺 実測図



関西学院考古 次号(第6号) 掲載予定

調査報告	長尾山古墳群Ⅲ
研究ノート	横穴式石室の平面形についてⅡ……………岡野慶隆
	1980年3月 刊行予定